村山教育事務所だより
E-NEWS むらやま
第２５８号
発行日：令和５年８月２３日
「E-NEWS むらやま」で検索または 右記ＱＲコード から。バックナンバーも見ることができます。

令和５年度　幼児教育の理解・発展推進事業
山形県幼児教育研究協議会 ～令和5年7月28日（金）～

Zoom 開催

村山管内の幼稚園・認定こども園をはじめ、小学校、中学校、特別支援学校、保育行政から、計１４３名の方々に参加いただき、日々の指導改善や幼児教育の充実について活発な協議が行われました。

幼児教育の三要領と指針では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」を共通の視点とし、どこでも同じ水準の教育が受けられるよう、環境を整えることが求められています。また、「10の姿」への理解を進め、幼児教育から小学校教育へのよりスムーズな接続を図ることが求められています。

全体講演

遊びの中で学ぶということ
～試行錯誤を支える援助の探究～

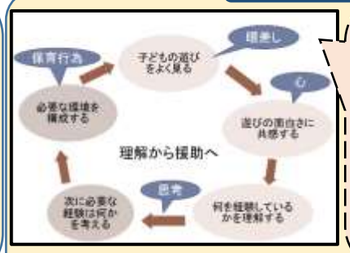
聖心女子大学
現代教養学部 教育学科
教授　河邉 貴子 氏

河邉先生は、日本の「遊びを中心とした保育」が抱える「**教えないと子供は育たないという古い考え**」「 **遊んでさえいれば子供は育つという偏った考え**」の二つの問題点を指摘されました。その上で、「遊びの中で学ぶ」ことについてのお話を通して、解決する手がかりになる考え方や方法等の御示唆をいただきました。

遊びと学びの関係

子供は学ぼうと思って遊んでいるわけではない。やりたいから関わり、面白いから繰り返すことで遊びが展開されていく。**そのプロセスの中で周りの環境（人やモノ等）と関わり、試行錯誤を繰り返しながら、結果としてスキルを身に付け、価値に気付くことができるようになる。**

試行錯誤を支える援助



河邉貴子氏 御講演スライドより

このスライドは、次の保育行為(援助)に至るまでの過程は、「子供の遊びをよく見る」ということから始まっていることを示しています。

特に大切なことは、**教師が「願い」をもって、子供にとって「次に必要な経験は何かを考えることである」**と教えていただきました。

感想より

★子供が毎日をいかに楽しめるか。面白い！と思えるような遊び・保育は何か？そのためには、どのような援助が必要か？子供たちを見つめながら、これからも考えていきたい。

★子供たちが体験を通してどのような思考・心情に至っているのかを読み取った上で、その子の特性に応じた適切な援助を行うことで、学びの基礎としての遊びが生まれていくことが分かりました。子供を見る視点をもって自分の保育、子供の姿を見つめ直し、今後に生かしていきたいです。

＜第1分科会＞竹田幼稚園の実践発表

幼児の自発的な言葉・姿・思いやつぶやきから、教師が幼児理解をした上で、「願い」をもって遊びの環境設定を行う取組

これからは常に子供たちの声に耳を傾けて、子供たちに寄り添った保育、夢中になって遊べる環境を提供していきたい。(感想より)

＜第2分科会＞幼保連携型認定こども園尾花沢幼稚園の実践発表

教師同士が「10の姿」で子供の学びを見取り、共通理解することを生かして、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を推進していく取組

「10の姿」をベースに園内や小学校で、その子その子の現状をしっかり把握し、連携していく必要があると感じた。(感想より)

My ボランティア スキルアップセミナー
Murayama Young

＜テーマ＞

令和５年度未来の参画者養成事業
期日：８月１日(火)・２日(水)
会場：山形県青年の家

未来への一歩 ～ つなぐ ひらく 見つける ～

今年度は、上記のテーマを掲げ、本セミナーを実施しました。村山管内 14 校より総勢 52 名に参加いただきました。また、各市町や学校のボランティアサークルで活動している高校生や大学生をはじめ、教育委員会や教員ボランティアを班付アドバイザーに迎えました。同年代の生徒同士だけでなく、様々な年代の方と意見を交流しながら、「ＭＹ（自分たちの）ボランティア」について考え、保育施設や放課後児童クラブで実践し、充実した２日間となりました。

ごみ拾い活動などと違い、相手が喜ぶ姿を直接見ることができて嬉しかった。高校生や他校の方と交流し、同じ目標に向かって話し合ったことも良い刺激となった。特別な機会や物資がなくても、自分のスキルで人を笑顔にできることが分かったので、今後も自分から活動していきたい。（山形二中３年）

ボランティア活動というと地域の美化活動が１番に思いつくが、人と接する活動もあるのだと知り、ボランティアへの意識が変化した。誰のために、何のために行う活動なのかを考え、計画を立てて実行するなど自分たちで活動を行うことは難しいと分かった。（天童一中２年）

同じ班になった他校の２人と色々な活動をしたり、計画を立てたりして、仲良くなることができた。同じクラスで仲良くなることと、ボランティアを通して仲良くなることは一味違った。ボランティア仲間の良さを実感した。（楯岡中３年）

この２日間を通して、ボランティアに対するイメージが変わった。今まで「ボランティア＝お手伝い」というイメージだった。今回は、企画の内容を自分たちで考えて、児童を楽しませる活動だったので、私自身も達成感を味わえた。（大石田中１年）

班のみんなが、「ボランティアはごみ拾いやキャップ回収だけだと思ったけれど、自分たちで企画してそれを実行することもボランティアだと知り、ボランティアへの見方が変わった」と言ってくれたので嬉しかった。もっとたくさんの人に広まってほしい。（高校２年）

私の中で、ボランティアを“している”という感覚より、“させてもらっている”という感覚に変わった。みんな、自発性が高く、自然と意見を出し合える雰囲気を作っていて、企画案にオリジナルの工夫を加えるなど、お互いに高め合うことができていた。（高校２年）

心を“ひらき”、人と人とを“つなぐ”ボランティアを経験し、新たな自分を“見つける”ことができた２日間となりました。“未来への一歩”を歩み出した参加者のみなさんが、地域や学校、日常生活の様々な場面において、新たな未来を切り拓く人として活躍していくことを願います。

【お願い】所報「E-NEWS むらやま」の電子化について

現在、学校等においては、ペーパーレス化が進んでいるため、本所報についても電子データでの送付について検討しております。そこで、試行的に次号の９月と 10 月に発行する所報（259. 260 号）を紙媒体ではなく、電子データで送付いたします。（各学校には、市町教育委員会から送付いただきます。）

なお、試行期間中に、アンケートを実施し、今後の送付の仕方について検討いたしますことを御了承願います。